

# 教師の労働環境と子どもの貧困認識

—— 退職・現職教師の世代的対照性を沖縄における 10 件のインタビュー調査から探る ——

仲 嶺 政 光

(富山大学地域連携推進機構生涯学習部門准教授)



## 1. 問題

いま、子どもの貧困が教育研究の領域でも各種メディアでも、広く問題とされるようになっていく。子どもの貧困問題は、不遇な子ども期・青年期、すなわち学校への就学期間を通しての貧困の「世襲」、世代的連鎖、再生産を導くという事実が問題だとされている。子どもの貧困問題への取り組みは、まず何より教師によってそれが「問題」として認識される必要があり、その上で子ども・若者への対策が実現可能となる。ところが、その際教師は次の2点で乗り越えるべき課題を抱えている。それは第1に、「親の職業や貧富などで子どもを差別しない」という学校の平等主義的なスタンスが貧困問題への認識や取り組みの障壁になることがある（久富 1993：162-163）。さらに第2に、格差社会が進展する中で教師自身の階層的地位が相対的に上昇し、そのことで底辺の実像が見えにくくなるという現代の問題が浮上してきている。「教員世界は圧倒的に『リッチ』です。かつては地方出身の苦学生が多かった職員室でしたが、最近は奨学金を受けてきた教員は私以外にない学年もありました。しかも、共働きの多い職場ですから生徒や保護者の生活にどこまでかかわるか、割り切れてしまうという側面はあるように感じます」（綿貫 2012：152）。教師たちはこれらの条件のなかであって、どのように子どもの貧困を認識しているのか。

本研究は、退職・現職の2つの世代間の労働環境<sup>1)</sup>を比較しながら、かれらの持つ子どもの貧困認識について考察しようとするものである。ここでとりわけ教師の労働環境の比較に着目するのはなぜかと言えば、日本の教師が世界各国と比べて異様に長い労働時間を担っていることに加え、ここ20年くらいの間に教師の精神性疾患の増加、および地域・保護者との関係づくりなどの困難化、などといった点において急激な変貌を遂げていることが指摘されているからである（久富 2017：51-64）。今日の教師たちには、子どもの貧困という他者の切実な生活困難・子育てに配慮した実践を企図するゆとりを十分に確保される必要があるが、その実態はどのようになっているのか。

本研究では、日本全国で最も貧困率の高い沖縄を調査地を選ぶことにした。戸室健作の調べによれば、2012年のデータでは「沖縄は、この20年間、常に貧困率が最も高い地域であったが、近年はその値が急上昇して34.8%になり、3世帯に1世帯以上が貧困という状況になっている」とされ、さらに子どもの貧困率をみた場合、全国平均13.8%に対し沖縄では実に37.5%にもものぼるといふ（戸室 2016：40,45）<sup>2)</sup>。2015年に沖縄県がおこなった独自調査でも、沖縄の子どもの貧困率は29.9%にのぼっており（湯澤 2016：67）、全国標準を大きく下回る経済格差、および貧困がもたらす子どもへの影響が浮き彫りとなっている。このような過酷な経済状況がどのように教師の貧困認識に現れているのか、把握を試みていきたい。以下では、本調査の概要を示し（2）、教師の労働環境について退職世代の場合と現職世代の場合とをみた後（3と4）、それぞれの世代における貧困認識を比較し（5）考察を加えることにする（6）。

## 2. 調査の概要<sup>3)</sup>

表1 インタビュー対象者一覧

	記号	世代	学校種別	勤務時期	インタビュー
退職	A氏	1930年代前半生	高校	1950～90年代	2016.5.5.
	B氏	1930年代後半生	中学校	1960～90年代	2017.2.7.
	C氏	1950年代前半生	小学校	1980～00年代	2016.5.24.
現職	D氏	1950年代後半生	高校	1980年代～	2016.8.21.
	E氏	1960年代生	高校	1980年代～	2016.8.23.
	F氏	1970年代生	高校	1990年代～	2016.8.23.
	G氏	1970年代生	高校	1990年代～	2016.8.23.
	H氏	1980年代生	小学校	2000年代～	2016.8.19.
	I氏	1980年代生	小学校	2010年代～	2016.8.21.
	J氏	1980年代生	小学校	2010年代～	2016.8.9.

- ・ **調査期間**：2016年5月5日～2017年2月7日。
- ・ **調査対象**：沖縄県における3名の退職教師および7名の現職教師あわせて10名（小学校4名、中学校1名、高校5名）、機縁法による。
- ・ **質問内容**：対象者の基本属性（学校種別・勤務校歴・性別・生年など）／教師の仕事上のルーティンと多忙化の様子／家庭の生活上の厳しさとはどのようなものか／子どもの貧困をどのように把握・対応しているか、など<sup>4)</sup>。
- ・ **調査方法**：半構造化面接によるインタビュー調査を実施した。インタビューは1件を除きすべてICレコーダに記録し、文字起こしをおこなって分析のためのデータ集を作成した。
- ・ **データについて**：データ集からの引用に際し、表1の対象者リストで示した記号A～Jを用いて匿名化し、学校名や地域名などの固有名詞には「某」「〇〇」などの字をあてた。また、読みやすさを考慮し、発言の趣旨に影響が及ばない程度の加除修正をおこなった。
- ・ **調査の担当**：B氏・C氏へのインタビューについては仲嶺が担当した。その他についてはすべて芳澤拓也氏（沖縄県立芸術大学）が担当した。

## 3. 「僕を育ててくれました」〔A氏〕——退職世代

まず、退職世代である3人の回想からかつての教育現場の様子を掘り起こしていこう。ここでのポイントは、①地域社会や職場での良好な関係構築、②子どもや若者たちがつかみやすいものとして存在していたこと、および③教師が仕事を進める上で、現在と比べるとゆったりとした労働時間の流れの中にあったこと、が見て取れることである。

### ① 同僚や地域社会との良好な関係

若くして代用教員となったA氏は、その後正教員を目指し教員免許の取得を目指すことになった。周囲の教師たちはそれを応援し、A氏は勉強時間確保にあたり格別な配慮を受けることができた。

- ▲ 代用教員時代はもう免許もとらなきゃならないし、できれば国費学生の試験〔沖縄復帰前の特別入試制度〕にでも通って……特に某高校では、〔A氏がかつての卒業生であることを〕みな知っていますし、母校に帰った最初の人間であることも知っているから、僕を育ててくれました。いわゆる公務分掌みたいのも、万年宿直やれと、宿直しながら勉強しなさいと。授業だけやればいいと〔A氏〕。

他方、B氏の新人教師時代の回想からは、かつては教師と地域社会との間に深く濃密なつながりがあったことを思わせるエピソードをみることができる。B氏とその同僚たちにとっては、地域の一人きりながらに労働や食事をともにし包摂され、互いに信頼しあう関係が築かれていた。

- ▲ 某中学校。ここはもう、非常に教師と生徒の信頼関係が厚いところでした。地域の人とのつながりも非常に強かったですね。学校と地域のつながりも。……部落の通りを通ったりするとね、畑で仕事している人が声かけるんですよ。「一緒にやってくれ」と言って頼むんですね。はい。一緒にやりましたよ。「じゃあ、1時間手伝いましょうな」と言ってね。〔そのお礼に〕例えばごちそうがあるときには学校に連絡があるんです。「今日うちに来てくれ」と。職場みんなで〔参加した〕。そういうことがいっぱいありましたね。その頃、道から通っているのを見たら、「ちょっと仕事手伝ってくれ」と言ってね。田んぼに入ったこともあるし。その代わり、ごちそうがあるとみんな呼ぶんですよ。職員を。「今日これがあるから寄ってきてくれ」といって。某地域ではそういうのがありましたね〔B氏〕。

他方、民間の研究会に積極的に参加し尽力してきたC氏もまた、地域からのバックアップを得た経験を持つ。C氏の実践は、子どもの日記指導とそれを記事にした学級通信の読み合いを軸としていた。それに触発された保護者たちは自主的な勉強会を立ち上げ、大いに盛り上がるようになった。

- ▲ 〔1990年ごろ〕子どもたちの日記でほぼ成り立っているような学級通信だから、親がものすごく喜んで。自分だけでなく友だちの声とかが、すごいいろいろ出てきて、親が喜んで、すごい親が結束してくれて。「こんな初めてもらう」って。なんか、忘れ物が多いとかそういうのはもらうけど、こういう子どもたちの生き生きとした生活を。自分の子どもはこうしてる、友だちはこうなんだ、とか。親との会話がね、すごいできるし。いろいろな問題がありますよね。教育問題。それを自治会みたいところで話し合おうっていうことになって。親が。ご飯食べて7時半ぐらいから2時間ぐらい、10時ぐらいまで。それを月いちで。月いちの学習会を親が計画してくれて。「先生と語る会」みたいな。そんなこともできたんですよ。……あっという間に終わって。早く帰らないと大変だよ、明日が、とか言いながら。……そのお母さんがチラシ作って、「配ってくれ」って。〔参加者は〕10人は下らなかつたような気はするけど。10人よりは多かった時もあるね〔C氏〕。

## ② 子ども・若者との関わり

では、かつての教育現場における教師と子ども・若者たちとの関係はどのようなものだったのだろうか。インタビューでは、戦後初期のころは「生徒指導も、あの頃はない時代ですからね」〔A氏〕という発言があった。このことは、必ずしも学校側の要求する望ましい生徒像が完璧に実現し、問題行動が皆無だったことを意味しているわけではないだろう。むしろかつての子ども・若者たちは、現在のいじめなどの学校・教師側が容易に察知・了解することができないような複雑な問題行動や関係性<sup>5)</sup>を見せることが少なかった、と解釈したい。

- ▲ 結局ね、〇〇魂という言葉は今言わないんじゃないかなと思うんだな。その〇〇魂とともに、〔職業高校なので〕実習がひっつきますね。そして某科と某科は実習が……うん、これが某高校の一つのカラーでしたね。年中出ていましたよ、〇〇魂。今でも言うかどうか。やっぱり実習ですね。……〇期生なんか、ご両親の顔もみんな浮かぶしね。ええ、何人か仲人もしてます。……ご両親とも話し合うし、泊まらせてもらったりもしてね。それで帰りにはお米をもらったり、そんな記憶がありますね。……某高校出身の父兄が一品料理をもって集まる。そこでみんなと話をする。これ、非常に鮮烈に〔記憶に〕残っています。……〔生徒を叱りつけたとき〕午後から生徒が集団で逃げちゃった。……あの頃〔戦後初期〕は、

高校受験するからとか言って、家へ帰ったら、勉強するって、みんなムラヤア〔村屋＝役場〕に集まって、そこに顔を出したりしてね、「勉強やってるな」って言って。教えるわけじゃないけども〔A氏〕。

- ▲ 60年代に〔某中学校に〕来たときは、学校を怠けるという生徒が多かった。金銭せびりとか暴力とかそういうのはあまりなかった。あの頃は、いじめとか金銭せびりとかじゃなくて、集団で学校怠けるというのがあった。……1人ずつ会って話をしてみると、決して悪いあれじゃないんですね。ひんまがった性格じゃないわけ。明るくて素直であると。〔学校をサボっている生徒が〕20名ぐらいいるわけね。森のところにいるわけよ。で、僕は気づかれないように近くまで行って、声かけたらパーッと逃げたわけよね。「待て待て、別に捕まえるために来たんじゃないから待て」と言ったら、待ったんですよ。……言いたいことを何でもいいから言いなさいと、1人ずつ言わせたわけよ。今1番どういうことが望みかと聞いたら、「学校に爆弾が落ちればいい」と言ってるわけよ。学校に爆弾が落ちたらみんな死ぬよと言ったら、「いや、人がいないときに落ちた方がいい」と。何でか、と言うと学校に来ないでいいから、と。学校嫌い。そしてたくさん話をして、色んな話をしているうちに、じゃあ、それは置いといて、自分の将来のことを話そうと。あんた何になりたいのかという話をしたわけよ。そしたら、みんな希望があるわけ。警官になりたいとか色々言うわけ。ああそうか、いいなあ、夢があつて、という話になってね。で、その夢を本当に実現するためにはどうした方がいいか、という話をしたわけ。……それを実現したいな、そのためには、やっぱり勉強した方がいいな、みんなと交流もあつた方がいいし、身体も鍛えた方がいいし、頭もちょっと磨かんといかんし、という話になって。あとは、じゃあ学校来ると。……そういうことがあつたりして。で、みんな先生方も、子どもたちのね、気持ちに立ち返って、心に響くような指導をしようという話になっている。それから随分良くなるという〔B氏〕。

- ▲ 〔1990年代初頭〕すごいよかつたんですよ。〔某小学校〕最後の学級。本当に。すごくいい学級で。子どもたちも。楽しかったです。あの時は。今もう30代になっているんですけど、クラスの子ども同士で結婚している人もいますよ。子どもができて、「孫見に来て」って言われて。見に行つて。で、結婚式も7月にやるから、「先生絶対来てよ」って。そんなこととかね。たまには来たことがありますね。みんなで。卒業して。酒持って。なんか一升瓶持ってから。今でも食べてますね。〔酒〕カメがあつたの。で、5升くらい入れてつっこんであるけど。いつ飲みにくるのかなあつて。楽しかったです……やっぱり対校長との、いわゆる日の丸君が代押しつけたり週案〔提出を〕押しつけたり、厳しい時代の学校だからこそ、なんか子どもを大事にして、親も連携して、みたい。意識的に組み立てたような気がする〔C氏〕。

高校受験に備えた勉強を集団で取り組む、「〇〇魂」に包まれた校風の形成、あるいは授業エスケープを可視的でまとまりのある集団でおこなう、それに対し「心に響くような指導」が成立する、保護者の顔が見える関係が構築できる、そして卒業後も私的で良好な交流が持続する——どれをとっても教師にとって歯ごたえや達成感を味わうものだっただろうことが想像できる。退職世代教師の回想の中には、学力形成や非行のあり方、ひいては広く人間関係のあり方が個々バラバラな状態にされた現在に比べるとその関係性の芳醇さがいきいきと伝わってくるものがある。中でもB氏の説論は時代的性格を感じさせるものである。というのも、とりわけ1960年代以降、伝統的な職業の世代継承がゆらぐ中で中学卒業後の進路選択は多くの若者にとって避けることができない重要な課題となっていた（木村・松田2011：29-30）。授業を集団エスケープした生徒らは来たるべき進路選択にあたり勉学が不可欠であること／怠学が不利益をもたらすことについて、それぞれ大きな説得力を実感し行動を改めていった。B氏は、説論に際して生徒らの怠学の深い理由——教育の職業的意義の希薄化（本田2009：86-88）や、学校の持つ画一主義的・能力主義的な抑圧からの解放を求めることなど、様々なものがありえただろう——には直接触れずに（「それは置いといて」）、つまり生徒との一定の距離感<sup>6)</sup>を保ちながら自らの人生設計と社会的自立にむけて取り組むよう諭し励

ますことに成功しているのである。

### ③ ゆとりのある仕事ぶり

続いて、退職世代の勤務状況についてみてみよう。インタビューでは、退職・現職世代ともに勤務の多忙さが述べられている。その意味で教師の仕事は常に「忙しくなければならない」（久富 1990：69）性質を持つものなのだろう。その忙しさの質は退職世代の場合どのようなものだったのかを振り返ってみよう。

- ▲ 教務主任時代。これはね、もう教頭補佐で、明るいうちに家に帰ったことないですよ。〔一般の教師は〕夏休みなんか顔も出さないで給料もらってたんだから。みんな。今はもう、ちゃんと研修届やらなにやら〔出さないといけない〕。その反動ですよ。昔は甘えすぎた。教員がね。……教務というのはね、結構雑務ですからね。入学試験の総采配をしたり。教頭と教務主任が勤務時間を超えて、薄暗くなるまでやりましたよ。……〔昔は〕時間があつたと言えるかもしれませんね。そういうの〔雑務〕はないから、教材研究だけ。学期末テスト、中間テストが終わったら、試験時間は午前中でしょ。今は午後も授業やっているというじゃないですか。ね、午後もね。あの時は、午後は採点とか、場合によっては〔企業との〕親善バレーボールをやったり、そんな交流をやつて。ええ、そんなのありますよ。そんな印象に残っていますからね。ところが今、そんなに〔忙しく〕なっちゃつて。あの頃は暇があつたから〔生徒指導に〕出かけていけた〔A氏〕。
- ▲ 年代によって違うと思うんだが、最初の 1960 年代はじめの頃は、8 時出勤で、一応勤務は 5 時まで。あとはもう部活。某中学校にいた間はずっとバレーやつてました。だいたい、部活は冬でしたら 6 時半まで、夏は 7 時半まで。……普段こう、何か早く学校引きあげて。あの頃は部活はそんなにまで盛んじゃなかったのね。だいたい 5 時半ぐらいで終わったんですよ。部活は〔B氏〕。
- ▲ もう、授業がいつもあるからね。担任以外したことないから、もう忙しくない時つてないですね。特にね、夏休みなんか。今がもっとひどいですが、夏休みに研修が入ってくるという。夏休みゆっくりしてたのに、それが段々崩れていった。〔1980 年代終わりごろから 1990 年代初頭にかけて〕学力向上の波が襲ってきたころからですね。前は研修もね、自分で自主的な報告をすればいつでも休めた。研修として。これは全くなくなりましたね。自宅研修が全く無くなった。こういう言葉自体も無くなった。旅行しても、旅行したものが教材だという見方をしていたんですよ。教師が楽しむだけじゃなくて、旅行することで視野を広げて子どもにあたることのできるんだから、どんどん行きなさい、自宅研修しなさい、みたいな感じがグラツと変わった。急激に。こういうの認めない。残念な方向にどんどん行きましたね〔C氏〕。

A 氏は自身の教務主任時代こそ多忙な毎日を送っていたが、一般に教師の間で時間的なゆとりがあつて生徒指導に時間を割くことができたとして述べている。また、B 氏における多忙内容は「部活」であつた。確かに部活顧問は、次第に教師の多忙内容に数えられるようになり、顧問教師の責任問題も浮上するようになってきていた（中澤 2014：128-129；2017：49）。しかし、B 氏からは今日の教師の世界に広がっている学力向上対策や膨大な書類雑務についての言及がなかった。また、C 氏は在職中を通じて週案提出をきっぱりと断り、管理職による執拗な提出要求をはね返してきた。さらに、習熟度別学級編成の導入に対してはその弊害を危惧し反対し続けた。ここにみられるような自由裁量や自律性が個々の教師の中に存在しえていたことは注目してもよいことだろう<sup>7)</sup>。加えて、教師の間では「休む」ということに倫理的抵抗感が強く、特に現在はその価値が大いに再認識され発想の転換がなされるべきであろう（浅野 1993：84）。また、教師の自主研修の裁量拡大も重要な

課題となっていることがうかがえる<sup>8)</sup>。

#### ④ 90年代までの変化：退職世代は過渡期を経験している

ここまでの流れだけをみると、歴史的過去は順風満帆な教師人生・教育実態のみが強調されるにとどまる。しかし退職世代は、表1の勤務時期にみるように80年代または90年代の教育現場の変貌を経験しているものである。実際、A氏の言う「○○魂」は過去のものとなり、B氏においてはいじめ問題や保護者とのトラブル対処が顕在化し、C氏は教育実践を進める上での困難を味わうことになった。退職世代が退職近くに至るまでのその過渡期的な様子についてもみてみよう。

- ▲ 座学では居眠りしているけど、実習になると目の色が変わってイキイキする。ところがね、それが時代とともに、高校入試というものが全入に近くなって、高校へ行けるのが当たり前になったら、その実習さえもちゃんとやらない子どもが出てきたという教師の嘆きはありますよ。後の時代から。……これは若い教員が言っていた。以前の子どもらは実習になったらイキイキしたのにね、今の子は実習の時にもぼんやりしてちゃんとやらん〔A氏〕。
- ▲ 〔1980年代、某中学校に〕着任する前に教育委員会から呼ばれて行ったら、実は今某中学校で、生徒の行動がね、思わしくないことがちょっとあると。だから、そういうところを気をつけて力入れてくれんか、というのがあって。そしたら、理由がわかってきたんですね。いじめがあるということで。いじめと金銭のせびり。だから、嫌で〔学校に〕行かないと。怖いと。……〔1990年代〕親と教職員とのいさかいというのかな。私が〔間に入って〕教師の代弁をし、お母さんの代弁をするのも良くないから、やっぱり一緒に会おうということで、話をした……まあそういう風にね、おだやかに、ゆっくり考えながらあれすると、ちゃんと解決策というのはあるんだと思う。そういうのはしょっちゅうあったね。〔話し合いを〕校長室でやったり、その家庭でやったり〔B氏〕。
- ▲ 〔1990年代半ば〕塾がどんどん押し寄せてくる頃……「先生は知らないけど俺達の間にはランクがあるんだぜ」って。だんだん学級が壊れてきて。……〔2000年代〕某小学校では、今まで一度もなかったことがあった。これ〔学級通信の子どもの作文を〕全部実名で出しているのよね。すごい殴ったり蹴ったりというのも実名で出したわけ。色んな問題が解決できた。学級会とか、それからPTAとかの集まりで、学級の問題はみんなの問題だから、ということで子どもたちも話し合うけど、お母さんたちも話し合ってたね。そうやって、実名で出すことは何も問題なかったんだけど、某小学校に来て最初の年、「先生、実名で出すのはやめて下さい」って。私が聞かなかつたから、私抜きでPTA総会みたいなの開いて、「C先生のこれは問題じゃないですか」って。「書かれたお母さんがどんなに傷ついていると思いますか」みたいな。言われた子の方が傷ついているんだと思うけど。色々言うけど伝わらない。裁判みたいだったよ。〔子どもの名前を〕隠していたら、これは誰かって追求して、また子どもにトラブルが起こるよっていう話を色々したら、「そうだよ」っていう人がいっぱい出てきて、結局はそういう〔実名掲載をやめるという〕決着にならなかったわけ。最終的にはね。ずっと〔教員を〕やっていて、すごい学級も作られて、問題だった学級が最終的にはすごく良くなって、というのが私のあれ〔実践パターン〕だったけど、これはちょっときつかったね。お泊まり会とか、毎年1回子ども主催の〔行事〕をやったんだけど、このクラスだけはできなかったね。親が教師を段々と全面信頼しない、軽く見はじめている。横のつながりをいっぱいつくろうとすればするほど、何か知られるのが嫌だという感じ。そういうのを私が崩してワッとやろうとするから余計なんか面倒くさい〔C氏〕。

このように退職世代にあっても教育実践の困難化がみられるわけだが、それはとりわけ2000年代まで勤務していたC氏の場合に先鋭的にあらわれているといえるだろう。現在、子どもの作文の

実名掲載・学級内での公表は実践的機微が不可欠となっている。例えばいじめ被害を受けた子を「仕返し」から守り、なおかつ加害側の議論参加・意見表明を保障するためにも、匿名からはじめるという段階的手法が必要になる場合がある（原田 2001：124-126）。従って、実名の掲載を徹底して貫き通すこと自体は必ずしも万能なやり方ではなくなっているのかも知れない。また、C氏が述べているように、現在は保護者のプライバシー意識の高まりや教師への信頼性の低下などが子どもの生活リズムを追究する生活綴方実践とぶつかる時代に入っていることが読み取れる。しかしここで重要なのは、C氏の実践スタイルが2000年代以前まで子ども・保護者双方に受容され、十分効果をあげるものだった事実（「色んな問題が解決できた」）にあるように思える。

#### 4. 「最近はまだ自転車操業じゃなくて一輪車操業だね」〔D氏〕 ——現職世代

現職世代になると状況は別世界の様相を呈する。以下では現在の教師の労働環境についてうかがっていきこう。

##### ① 労働時間の長さ

現職世代は、明らかに出勤時間が早まり、また退勤時間も遅くなっている。D氏の場合は「早朝講座」のために7時15分に出勤し、学校が機械警備の時間となる8時に退勤している。授業の合間の空き時間は教材研究とは「別の雑用」をこなさねばならない。夏季休暇は「全くって言っているくらいとれてない」。またI氏の場合、子どもとの対話時間を確保するために6時半には出勤し、時に8時を超えて退勤するケースなどがあり、1日に14時間学校にいることもある。あるいは「とっても忙しい。一旦明日のものをおうち持って帰って」〔J氏〕教材研究に取りかかることもザラである。現在の教師たちはとにかく時間がない。しかもそれが充実した教育労働時間とはかけ離れたものとなっている点に重大な問題がある。

▲ 自分自体が学ぶ時間がないし、子どものこと考える余裕もなくなっちゃうし。〔時間がないと感じるときは？〕子どものためにならない研修させられてるとき、子どものためにならない話し合いをさせられてるとき。学テ対策と、あと、学校訪問の対応。そのための資料作り、対外的なものの資料作りですね。〔例えば週案づくり。〕週案なんてもう時間かけてられないです。週案5分で書かなくちゃ。……午後8時におうちでご飯食べてるっていうのは、久しくないです〔H氏〕。

##### ② たてつづけの研修

現職世代教師たちの多忙内容をもう少し詳しくみてみよう。まず筆頭にあげられるのは各種研修の多さである。インタビューでは、初任研・2年研・3年研・10年研と続いていることの大変さが確認された。「学校現場で10年って言うともうベテランなので、すごく重たい仕事についているのに、もちろん〔研修中ということでの〕配慮はなく、初任研みたいにけっこういろいろ研修とか入ったりする」〔D氏〕。もちろんベテランばかりではない。「忙しいです。初任研のときは、研修と授業の忙しさ」〔H氏〕、「初任研から、2年研、3年研まであって。なんか、毎年授業を見せないといけなかったりとか、とっても疲れるなって思って」〔J氏〕。この他、「週1回の算数ミーティ

ング」「学年会」など校内的業務もまた多忙の1つに数えられる〔I氏〕。

### ③ 全国学テ対策

沖縄では「学力全国最下位」からの脱却を目指して久しい時間が流れたが、その基本路線は今も変わらない。沖縄県は全国学テ正答率の向上を子どもの貧困対策の一つに結びつけ、「全国水準」への到達具合を数値目標として掲げている（沖縄県 2016：52）。しかしながら、全国学テの正答率向上運動が教育実践の中でどのように取り組まれているのかは問われることはない。またそこでは、全国学テの結果がどのように子どもの貧困対策に結びつくのか、ということは自明視されている。むしろ、沖縄の学力はなぜ「低い」のかを問題視し、そしてどうすればそこから脱却できるのか、ということへの取り組み自体が自己目的化しており、残念ながら沖縄の子どもの貧困問題の解消にまさる優先的課題となってしまっている。もちろん、子どもの学力保障じたいは重要な教育課題の1つであることに間違いはない。また、学力問題は多くの沖縄教師たちの「善意」によって取り組みられ、一定の社会的支持が調達され続けているものだろう。しかし現在の学テ対策の中には、テスト結果を上げる授業がよい授業、などという「学力テスト神話」がひそんでいる。全国学テの結果とは、現実には「教育実践の成果以上に、経済要因と連動した生活基盤に大きく左右される……『学力低下』や『学力格差』はその根もとで『貧困問題』や『経済格差』と密接な連関にある」（岩川 2007：337-338）。現職世代教師は、日常的にくり広げられる学テ対策のむなしさを実感しつつ、しかしそれに多大な時間をかけて取り組まざるを得ない状況に置かれている。

▲〔学テ対策は〕わからない子たちのためになってない。とつても無駄だなんて思うんですけど、学テで、落ち込みどころがある単元を何回もやる。意味理解じゃなくて。膨大な時間を費やして、データを出すんですよ。県平均と学校平均がどれだけ違うとか。そのことをひたすらやっています。だから子どもの前になくて、パソコンの前にひたすらいます。……この問題は解けた、と思うし、教師もそのときにはこの問題はできたって思っちゃうんですね。けど、やっぱり意味理解の部分では多分できてない。その時間がほしい、ほんとにそれだけなんです、ほんとに〔H氏〕。

▲〔学テ対策は〕ひどいです。私思うんですけど、学力テストって6年じゃないですか。だけど、学力テスト対策とか到達度テスト対策できついの5年だと思いました。5年の後半はずっとプリントとか。5年の担任が一番つらいと思います。……5年生はもうキツキツの状態です。朝の時間の読書をプリントに変えたり。授業も1時間学年で揃えて、過去問を問いておく。ほんとに毎日採点とかしてて〔J氏〕。

### ④ 地域・保護者との関わり

既にみたように、退職世代は地域・保護者との良好な関係を維持してきたものだった。しかしこの実践的利点は現職世代では大幅に後退している様子がうかがえた。地域社会は、教育問題の解決に向けて結束する存在から、格差社会の論理によって分断された様相へと変貌しつつある。

▲〔某地域では〕大学の先生とかもいるし、お医者さんとかもいます。……でもけっこうアパートも多いです。なんか、一軒家は少ない気がします。一軒家のところは、とつても豪華できれいな一軒家に住んでいる感じですね。〔学力格差はある感じが〕します。やっぱり裕福なところはけっこう勉強も力入れてた



んで、習い事とかもやってる子も多かったです。塾、公文とか、算盤から。でもやっぱり貧困、なんかとっても厳しいなっていうところの家庭は部活も入ってない、習い事なんてしてない。で、学力もそんなに高くない。……要保護とかいたんですけど。ほんとに靴の底とかも抜けたり、ばかばかしながら歩いてたり、ちょっと洋服とかもすごく気になって。……この子本当にランドセルも破れてたりしたんですよ。あと、靴とか。一応お母さんに連絡入れて、今、靴底こうやってばたばたしてる状態なんで、買えませんかとか連絡入れて、一応分かってくれるお母さんだったので、よかったんですけど。……母子家庭でした。だからとっても差がある気がします〔J氏〕。

保護者との信頼関係の樹立も難しくなりつつある。「何かあったときに、保護者は担任に相談せず、すぐ学校にぼんと電話してくる。まあ、学校に電話してくるんだったらまだいいですけど、すぐ教育委員会に言ったりとか」〔D氏〕。あるいは「〔保護者同士のつながりは〕強いとは思わないです。すぐ怒鳴り込みに来るって感じですかね。まず話しようとかじゃなくて、絶対おかしい！って、そういう目で見てる感じがしますね」〔H氏〕。

このような「通報・怒鳴り込み」の背後には、保護者自身の生活困難・子育て上の苦悩があることも多いだろう（今関 2009:48-51）。F氏によれば、保護者からの電話には子どもの家出の相談や、教師にかまわず「ずっと話し続ける保護者」の姿がある。またG氏は遅刻・欠課・欠席など「勤怠に関わること」は親自身の多忙が重なってうまく連絡・コミュニケーションがとれない状況もあると述べている。そして実際、F氏・G氏がそれぞれ口をそろえて述べていることは、「生徒のことは学校で見てほしいという雰囲気があった」「〔子どものことは〕学校の先生に任せたいって言うところが、あるような感じがしますね」という印象であった。これは各生徒の諸問題を教師が丸がかえせざるを得ない関係性に他ならず、先のB氏説論のなかにみられた「一定の距離感」を支える基盤が崩れつつあることを見てとることができよう。

P T A活動の様子にも格差と貧困が影を落としている。E氏は「P T A会長が毎年変わるような形だったので、〔活動に〕一貫した方向性っていうのがなかなか組めなかったり、結果としてP T A活動が停滞していたので、やはり母子家庭、父子家庭が多いので、なかなかP T A活動に参加できる絶対数が少ない」と述べている。G氏もまた、「厳しい学校とかは、あまり〔P T Aの行事に〕集まったりしないっていうことが、はい。ありますね。多分、なかなか仕事が休めないっていうのがあるんだと思いますね。全部が全部、正社員ではないと思うんで。多分、有給とかでもなくて」。授業参観も同様である。「授業参観率とか、こういうの全く違いますね。色んなところで沖縄の貧困の影響がでてきてるなって感じていて」〔I氏〕。

ところで、子どもの生活現実を知る重要なきっかけの一つに家庭訪問がある。「家庭調査票上は母子家庭だけど、あ、お父さんがいるとか、そういうのは気づきますね」〔H氏〕、「家庭訪問で、とってもおうちが荒れてるとか、なんか気になりました。」〔J氏〕。ただ、おそらく教師の多忙化とそれによる業務整理によるものと思われるが、家庭訪問がなくなりつつある、という声があった。「振り返ると、家庭訪問が無くなったという変化がある。家庭訪問でいろんな情報がわかることがあったが、無くなっている」〔F氏〕、「〔家庭訪問は〕行かないですし、時間もない」〔I氏〕。だが、次のC氏の指摘にみるように、家庭訪問の時間を確保することは子どもの生活実態を知るきっかけとして重要なものである。

▲（家庭訪問は）絶対大事ですよ。やっぱり親子関係とかきょうだい関係とかって、子どもの貧困もそうだけど、子どもの家庭での位置とかね。親がどんなふう子育てるとか、机とかも有るのか無いのかとか。で、

なかなか宿題してこないとかいったらやっぱり定位置がなくて、机が無かったりするとか。そういうのをわかってあげると、「じゃあ、もうおうちに帰る前に学校でやって帰ったら？」みたいな、そういう声かけもできるし。「先生ちょっと仕事があって残るから、やるならやってもいいよ」みたいなことを言ってあげたり。やっぱり家庭の事情をわかって子どもを理解してあげるといのはとっても大事なと〔C氏〕。

#### ⑤ 子ども・若者たちの変貌

現在は、かつてよりも子ども・若者の姿がつかみづらく、そしてかれらがより生きづらくなっている点も指摘しておきたい。先に退職世代A氏・B氏の回想にみられたような集団エスケープは現職世代の中にはもう見当たらない。むしろ現在は個々バラバラにいじめや不登校などの問題が教師を悩ませる時代となっている<sup>9)</sup>。

- ▲ 今、不登校になってるの、まあ不登校になってるって言っても、結局保健室登校をしている生徒と、全く来れなくなってる生徒と分かれるんですけども、こう、精神的な問題、それから病気、規律性障害でした？それで、今ちょっと来れなくなってる〔E氏〕。
- ▲ 某高校なんですけど、やっぱり、携帯とかネットがずっと流行りはじめて、ネットでのいじめっていうことで、もう、割と普段からにこやかにしていて、友達関係も作っているような子が、裏でネットのいじめだったり、教師の誹謗中傷とかだったりっていうのをやっているの〔E氏〕。
- ▲ 某高校への赴任のときには、〔生徒〕一人ひとりの重みがあった。経済的な厳しさ、メンタル面のゆれ、心のケアの必要〔F氏〕。
- ▲ ちょっと貧困とは離れるんですけど、親の期待感から来る苦しさを感じている子はとっていても、やっぱり塾通いだとか、特に受験も控えていたりとか。そしたら、あの子、塾〔のこと〕でお母さんにめっちゃ怒られてたんだよとか、そういうものを聞いたりとか。なんか、最近とっててもイライラしてるんだよ、って弟いじめてたんだよって。何でかなっていったときに、いつもお母さんがなんか、冷たいって言ってたよ、みたいなことも聞いたりとか〔I氏〕。

## 5. 貧困認識の世代間比較

続いて、退職世代と現職世代の貧困認識がどのような構図になっているのか、それぞれみていきたい。まず、退職世代であるA氏・B氏・C氏の場合である。

- ▲ その頃どうだったんだろうな。そういえば、授業料未納をひっぱって、授業料未納を掲示に書きだして、やったことがあったかな。そして、期日を間に合わないで納めた人を、後で墨で消すっていうのが、あったような気がするが、どうだっただろう。今言うね、新聞で言う、それなりに私も〔貧困の記事を〕見ますよ。でもそんなに、あんまり知らないな。……家庭訪問をしたけども、貧しさよりも、一頃某高校は退学者が多い時代があってね。入学した生徒の半分くらいは消えて行っちゃうようなクラスがあったような気がする。しかし貧しさと言うのが新聞で出たような気はしないな。貧乏の話、ちょっと弱いかな。ピンと〔こない〕ですね〔A氏〕。
- ▲ 〔貧困は〕はい、ありました。これは、古ければ古いほど貧困は多かった。今の時代よりも。某中学校に行っ

た頃は、あの頃学校に出る金といったら教科書代と、あるいは何か実習をするものは実習の材料代とか、それからPTAの会費とか、義務教育だからそんなにたくさんはお金は出ないのよね。それでもピン集めをする生徒が多かった。某中学校にいたときの校長の提唱で、毎日ピン一本学校に持ってくる。(月に)24～25日ぐらい学校に出るわけよね。24～25本ぐらいピンを持ってくることになる。で、ピンを買い取る業者を1ヶ月に1回呼んで、ピンをとってもらおう。誰がいつ何本ピンを持ってきたというのが記録されているから、お金あげるわけですよ。ピン代。今度はお金あげた日に農協さんが来るわけです。で、個人個人の通帳を作って貯金をする。それを貯めて修学旅行の費用にするとか、高等学校に行つて授業料にするとかいうのがありましたね。(1980年代)そういう子どもについては、役所を通して民生委員に連絡をとって、生活保護が該当するかどうか、というようなこともありましたね。役所と連携して。何名かそれを、親が生活保護を受けてなんとか高等学校に行つたという子どももいます。それから、そういうものに該当しないで、高等学校に行けなかった子どももだっていますよ。それから、私が勤務する以前の時代では(貧困な人たちが)もっとたくさんいたよ。とにかく(高校進学者は)少なかったです(B氏)。

- ▲ (2000年代に勤務した学校が)荒れた。荒れた時期が多くて、割と大きな某地域の市営住宅があるんですよ。ダーツと。あの子たちが来るんですよ。団地からも来る。貧しさもね、ハンパじゃない貧しさ。不登校で、1軒の家に何人も、おじさんからお婆さんからみんな住んで、生活が苦しそうな感じの子もいましたね。ちょっと格差があったような気がする。そういう、市営住宅のおうちの子なんかも、お母さんが働きに出てね、なかなかおうちの子どもを見れないとか。そこはやっぱりものすごい貧困の子もいましたね。……その時思ったの。私自身が福祉につなぐことをわかってない。教師が。大変な時に、「ここに相談したら」っていう、そういうことを知識を少しでも持っていたら、あの子もう少し救われたんじゃないかなと思って。指導の中身でなんとかしようというのばかりあって。(教育実践の。)そうそうそう。「この子なんとか学校に来させよう」とか。この子をイキイキとさせることで救っていると思ってたんだけど、根本的には何も解決できなかった。あ、そうか、福祉につなげる、児童相談所とか民生委員とか、そういうこととの連携の大事さっていうのをあそこで学んだ。それから、(2000年代後半)某小学校のときは民生委員の方とか、一緒に行くようにしたり、民生委員の方とお話したり、退職して民生委員になった先生もいらっしゃるから。相談して、おうちに行ったりすることをするようになったんだけど。やっぱり教師はちょっとその辺がね。貧困対策の中に、プラットフォーム、沖縄に出てくるんだけど、そのプラットフォームっていうのは、子どもたちをどこにつなげていくかっていう。こういうことは今の教師にはできないかなと思って。忙しくて……(3人に1人が貧困というデータについて)ほとんどの教師は実感しない。服だって安く買えるしね。みるからに貧困という格好してくる子はいなくて……実感としては10人に1人。クラスに3人いるかな、みたいな。おうちがすごい汚れて、ゴミがあちこち散らばっていて、そういう見るからにこの家は大変だな、というのは3人ぐらいかな。だから3人に1人というのはちょっと(C氏)。

A氏にとって子どもの貧困問題は「あまり知らない」「ピンとこない」問題であり、むしろ中退問題のみが印象に残っている。そこには、中退が貧困と関連している可能性についての認識をうかがうことはできない。また、B氏においても子どもの貧困問題は比較的過去に顕著なものだったと受けとめられている。A氏・B氏両者とも、沖縄戦による壊滅的な打撃を受けた後の戦後窮乏・復興期の学校生活を体験していることが、現在の相対的貧困に対する認識にまさる戦後初期的・絶対的貧困像の印象の強さに影響を与えているものだろう。またC氏は、教育実践の力で子どもの諸困難を乗り越える姿勢を長く貫いてきたが、後に考えを改め「福祉につなぐ」必要性を実感することになる<sup>10)</sup>。退職世代にとっての子どもの貧困問題は、他の同時代的な教育問題群と比べいまだ顕在化せざるものだったと言ってよいだろう。

他方、現職世代の子どもの貧困認識はこれとかなり異なっている。ここでは、かれら教師たちの

目を通してあらわれる子どもの貧困の実態を見ていくことにする。

### ① 昼食費が捻出できない

給食のない高校段階になると、お金がなくてお昼ご飯が食べられない若者たちが目立ち始める。皆がみな「弁当箱パッと見て、色とりどりの野菜とか」〔D氏〕が入った食事でありつけるわけではもちろんない。ここで重要なことは、お金がないことが居場所の喪失につながることである（阿部 2011：118）。ランチタイムに食事をするのが「当たり前」の雰囲気の中、食事を用意できない場合はそこに居づらくなる、そのような若者たちが図書館などに放逐されてしまう、という問題が出ていることが指摘されている。

- ▲ やっぱり弁当見て、買い弁……200円ぐらいとかで買えるんですね。お母さんのいない子で、お昼はもう食べない。お金がないから。お昼は節約のために食べてないんだとか、あるいはほしくないという言い方をして、教室から離れてみんなが食べてるその時間は図書館行ったりとか〔D氏〕。
- ▲ これだけしか食べてないとか、食事やお弁当を見たりする。何か気が付けば担任に伝えている〔F氏〕。
- ▲ 図書館係をしている先生が、しょっちゅうお昼ごはん〔の時間〕になったら図書館に来る生徒がいるってことで、最初は本が好きかなって思って見てたんだけど、よくよく話とか聞いてみると、この、食事代金がないってことで。だからお昼は食わずに図書館にいるっていう子がいたっていうお話してましたね。〔1人で?〕個別なので、喋ることができたのかな、集団……でも何名かいつも図書館にはいたって言ってたので〔G氏〕。

### ② 通学費が捻出できない

通学のためのバス賃が捻出できない問題が指摘されていた。E氏によって紹介された事例では、片道1,000円ほどかかるバス賃を「自分のアルバイト料で出している」のだが、足りなくなると通学ができなくなる。「すごい真面目な子で勉強も出来るんだけど、月に1回2回必ず休みますよ」。また、G氏によれば、遠距離の通学路を徒歩で通うことで節約しているケースがあった。「バス賃がなくて、朝も1時間、帰りも1時間かけて歩いて」。

### ③ 医療費が捻出できない

虫歯の治療ができないことも子どもの貧困問題のあらわれとしてよく指摘される。「う歯〔虫歯〕の罹患率は所得の連続的勾配にしたがって悪化する、言い換えると所得格差が健康状態の社会的格差になっている」（武内 2016:71）。D氏は「よく〔貧困と虫歯の〕相関関係があるって言われるじゃないですか、最後に〔歯科医に〕行くっていう。〔生活が厳しい子が〕クラスで一番虫歯が多いですね」と述べている。また、「特にとてもこんなところが違うんだって気づいたのは、虫歯が、去年某小学校は6年生2人だけが虫歯で、あと全員〔虫歯がない〕。で、この二人も虫歯なしになったので〔治療状況に学校差＝地域差が大きい〕」〔I氏〕とも言われている。

#### ④ 授業料・校納金・部活費用などが捻出できない

子どもの在学中はどうしても学校に現金を納入しなくてはならない機会が出てくる。授業料や校納金の滞納、部活のための費用捻出不能、などの様子が現職世代教師たちの目にとまっている。「[校納金が払えないのは] 校内に30～40名はいると思います。丸々1年間滞納しているとか、丸々2年滞納してるっていう子も2～3人ずついますので。普通に1回分をその場その場で払えていないっていうのは、50～60人になりますかね。1割ぐらいがそのときにさっとお金が出ない」[E氏]。督促の際は生徒への心理的配慮がなされる場合もある。「生徒には言わずチャンスのみを保護者に伝えるようにしている」[F氏]。「生徒も多分、居づらくなると思うんですね、しょっちゅうしょっちゅう〔督促〕なので。……何かしら徴収金に関しては気を使います」[G氏]。

部活動への参加が疎外されている様子もうかがえた。「金銭的な余裕がないから部活に入れなかったりとか、っていうのがあって」[E氏]。「部活が盛んじゃないですね。先生とか部活もさせたいけど、バイトする子どもたちが多くて、部活盛んじゃないですね。だから、放課後静かな感じが」[G氏]。「やっぱり貧困、なんかとっても厳しいなっていうところの家庭は部活も入ってない」[J氏]。

沖縄でよくある慣行だが、クラスでオリジナルTシャツをつくることがある。現職世代教師たちには、この出費に対する懸念と配慮もみられた。

▲ 家庭の事情が異なることを考えると、学級Tシャツを作るようなことは、あまりやりたくないのだけど、某高校では生徒の希望で学級Tシャツを作ることになった。この場合、保護者から「聞いていない」と言われて、親子間のトラブルになることがあるため、私の方から先に保護者にメールを打って連絡をいていた〔F氏〕。

▲ 学級Tシャツとかあるじゃないですか。私は賛成ではないんです。2校目3校目はやっぱり厳しかったので、こういったのも作らなかったの。某高校に来てからはみんなどのクラスも作ってるんですよ。私は厳しい家庭の子もいるから、どうかと思って。別に体育着でも私はいいと思って話したんですけど、でも生徒たちは作りたいって言って。だから大多数作りたいって言って、あえて体育着とかにした場合、ひとクラスだけポツンと、それもなつて思って、今年は作りはしたんですけど。学級でTシャツをつくるとか、何かするってときには、ちょっと足踏みします〔G氏〕。

#### ⑤ 服装・身なりの清潔さを維持できない

服装・身なりのあり方もまた貧困が目につきやすいものである。「アイロンかけられてないとか、制服が。とか、ちょっとやっぱり不潔、制服が毎日もしかして洗われてないかな、とか」〔D氏〕。「制服にアイロンが掛かっていなかったり」〔F氏〕。

▲ しらみが駆除がされない。ずっと1年生から5年生になっても、この子のしらみ駆除をやってくれない。家庭ですかね。だからもうこの子ってみんなばれてしまっていて、これがいじめに。……マットも出来ない、プールもできない。で、なんとか担任はシャンプーとかで対応したりするんですけど、なかなかくならない〔H氏〕。

⑥ 留年・中退・進学辞退など学費が捻出できない

留年や中退は貧困だけが原因ではないのかも知れないし、原因そのものがつかみにくい性質がある。しかし、はっきりとお金がないという理由で学校生活をまっとうできなかつた、とする言及があったことは注視すべきことである。「校納金も全部完納して退学するんですけど、これがもうずっとずっとたまって、〔学校を〕辞めたいんだけど、これが未納のため、手続きが進まないとかそうした状況がありました。学力も厳しかったです、多分、家庭がとても厳しい状況で、勉強に集中できる環境じゃなかったっていう印象が強いですね」〔G氏〕。さらには大学入試に合格した後に入学金などが支払えないことが発覚し、進学を断念せざるをえないというやるせないケースがいくつも紹介された。

- ▲ 毎年いるんですよ。1人、2人。校長名で〔入学辞退の〕謝罪の手紙を書いて、申し訳なかつたですって。……それが必ずいるので〔D氏〕。
- ▲ やはり生活保護世帯が多いということと、父子家庭、母子家庭が多いということ。だから、3年前に担任してたんですけど、大学合格したけれども、入学金が払えずに辞退。入学できなかったっていう生徒がいて〔E氏〕。
- ▲ 大学に決まった子がいたんですよ、県外に。学校推薦で。まあ、いい学校だったんですけど、結局学費が工面できないということで、流れたっていう事例もありましたね。……報告が進路部からあったんですけど、「それ以上深いことは聞かないで」っていうふうにおっしゃってたので。いろいろな背景はあったんだろうなと思いますね〔G氏〕。

⑦ ひとり親世帯に生活困難が集中している

現職世代の教師達の多くが、ひとり親世帯のしんどさを実感している点も特徴的であった。とりわけ、教師にとって「母子家庭」というキーワードは貧困を認識する際の重要な指標になっているようにみえた。

- ▲ これ〔貧困〕はもう、実感してます。……週刊誌に沖縄の貧困っていうのがいくつか記事があつて。貧困家庭であるがゆえに、早婚、早く結婚して、旦那が働かないとか暴力をふるうということで、結局母子家庭になってしまったりとか〔E氏〕。
- ▲ 両親が不在で、祖父母に育てられていた生徒がいた。母子家庭や父子家庭は多かった。もちろん頑張っている家庭もある。しかし、自分の生活で精一杯の家庭もあった〔F氏〕。
- ▲ 保護者がひとり、お母さんだけ、ここ〔沖縄〕ではなかなか働いても収入が得られないっていうことで、県外に行っている。で、そこから仕送りをしてくてるらしいんですけど、それも少なく、結局ここに残ってるきょうだいでアルバイトをしないと生活ができないということで。……結局この子は、朝5時半ぐらいにコンビニ、朝の時間帯やって、学校に来て、そして学校が終わった後、また夕方からのシフトに入るってことで、どうしても疲れも出るし、学校をだんだん来なくなってきたって、そういう事例もありましたね。……〔別の事例で〕母子家庭だったり。きょうだいがいるじゃないですか、お姉ちゃんが

出したときの書類のときには両親揃ってたけど、妹のときにはお母さんだけになってるとかもあったので、ちょっとやっぱり気にしてしまうんですよ。だから、私は何かしら徴収するってときには、そういう気を遣います〔G氏〕。

- ▲ 母子家庭のところ、ここはもう、逃げて出てきて。……もう朝と夜が全然逆転しちゃってて、全然もう学校に来れないところがあった。あまり学校来れてないんですよ。楽しくないんだと思います〔H氏〕。

## 6. 結論

以上にみてきた世代間比較の諸点（勤務時間・多忙感・貧困認識）をまとめたのが表2である。既に述べてきたことだが、今日の教師がますます多忙な状況になりつつあること、それは勤務時間の長さの中に示されていることが指摘できる。また、そうした中であっても、現在の教師たちは子どもの貧困認識を深化・具体化させている様子もみられた。だが、C氏が「こういうこと〔福祉との連携〕は今の教師にはできないなと思って。忙しくて」と述べているように、今日の教師の多忙内容は子どもとのふれあい・関わりあい——それは子どもの貧困への取り組みを実践する上での基礎的な条件となるものだろう——を疎外する方向へと追いやっている。教師が教育の仕事に自信を持って取り組み、なおかつそれが十分な達成感を得られるような労働環境をどう構築するのか、という重要課題がある点は強調しておきたい。

- ▲ いつまでたっても自信が持てない職業だと思います。よくわかんないけど、PDCAやりなさいって言われることとか。制度的なものが自信のなさにつながってると思うんですけど。……働き方がまだ今分かってないんですよ〔H氏〕。

また、今日の教師の過酷な労働環境にも関わらず、子どもの貧困という生活現実の方は過去よりも具体的で生々しい認識となっていた点は注目される。筆者は、調査に先立って「今日の超多忙化の中であって、教師たちの子どもの貧困認識は退いているのではないだろうか？」などというやや短絡的な予想を持っていたのだが、それは実際とは大きく違った。教師たちには子どもの貧困がかなりの程度見えている。これは沖縄における子どもの貧困の深刻さを思わせる事実でもある。

子どもの貧困問題は、時代を問わず常に存在するものなのだろう。しかし近年の教育現場ではそれがはっきりと問題として浮かび上がってきていて、なおかつ教師らの間で関心も高まっており（盛満 2017）、学校で表面化する子どもの貧困に対し何らかの対応や工夫もなされているようになってきている（高石 2016：227-232）。従って今後重要なのは、教師がどのように子どもの貧困問題に取り組んでいくべきなのか、ということの論議の広がりや充実にあるように思える。今こそ教師が正面から子どもの貧困問題に本格的に向き合う時代にさしかかっている。そのためにも、教師のゆとりある労働条件の整備を急ぐ必要がある。

表2 退職世代・現職世代の対照性

記号	勤務時間	多忙感	貧困認識	
退職	A氏	現在の教員は大変。以前は夏休みなんか顔も出さないで給料もらっていた。今はその反動がきている。昔の教員は甘えすぎた。いろいろきついこともあったが、今のように時間になんじがらめのようなことはなかった。	授業料未納者を掲示に書きだしたことがあった。収めた人は後で墨で消す。今で言う、新聞で貧困をそれなりに私もみるが、あんまり知らないしピンと来ない。	
	B氏	8時出勤で勤務は5時まで。その後部活の指導があり、冬は6時半まで、夏は7時半まで。ただ新人時代は5時半ごろには帰宅。	貧困はあった。しかし時代が古ければ古いほど貧困は多かった。今の時代よりも。私が勤務する以前の時代ではもっと貧困な人びとがたくさんいた。	
	C氏	出勤は7時30分の時もあるが8時をメドに。帰りは7時とか7時30分とか。	忙しかった時期は夜の夜中までバタバタ。その頃お金がないのにお手伝いさんを雇って夜のご飯を作ってもらっていた。授業がいつもあり、担任以外したことないから、もう忙しくない時はない。	市営住宅にはものすごい貧困の子がいた。福祉につなぐ必要があるが、今の教師には忙しくてできないだろう。貧困の割合は10人に1人程度だと認識されている。
現職	D氏	早朝講座を担当しているので7時15分くらいに出勤。帰りは8時までで学校にいる。忙しいときは土日も出勤する。	最近ではもう自転車操業ではなく一輪車操業。空き時間は授業の準備よりも雑用処理が多い。十年研などは重たい仕事である。夏季休暇は全くというくらいとれていない。仕事は本当に増えてきている。	経済的に厳しいっていうのはゼロではない。アメリカンや外国籍の子、虫歯が多い子、アイロンのかかっていない清潔でない服装、買い弁または昼食抜き。
	E氏	週2回早朝講座があり7時30分に出勤、それ以外は8時頃出勤。帰りは6時、7時くらい。	校内研・校外研が増えているので夏休みも2週間くらい研修がある。初任研と免許更新が重なるとまるでプライベートがない。	生活保護世帯、母子・父子家庭。校納金を滞納する生徒、部活に入れない生徒。
	F氏	—	雑務が多くて時間がかかる。公文書類が多かったり、書類に沿ったデータが必要だったり、「調査」や「〇〇研究」のようなものがある。	母子・父子家庭。頑張っている家庭もあるが、自分の生活で精一杯の家庭もあった。生徒のことは学校でみてほしいという雰囲気。昼食抜き。
	G氏	7時40分くらいに家を出て、8時から8時10分出勤。	特に4～5月までが忙しい。5月までびっしり行事等が入ってくるし三者面談とかも並行してやっている。	欠課時数や中退が多い。家庭がとても厳しい状況で勉強に集中できる環境じゃない。母子家庭。校納金の滞納。昼食抜き。子どものことは学校に任せたいという雰囲気。部活が盛んじゃない。
	H氏	6時45分に家を出て、7時40分に出勤。子どもたちを帰してから職員室に戻るのがいたい4時。帰りは7時、8時くらい。	自分自身が学ぶ時間がなく、子どものことを考える余裕もないため、いつまでたっても教師として自信が持てない。学テ対策、学校訪問など。子どもの前にいなくて、パソコンの前にひたすらいる。	徴収金がずっと未納の子がいる。ひとり親世帯、若い親の世帯、きょうだいが多い。
	I氏	5時半に起き、6時半には出勤。7時半から子どもと対話。4時に授業が終わり、6時半ごろに終業。しかし遅いときは8時半まで。	学年でやる作業がとて多い。今学校が算数に力を入れているので週一回ミーティングがあって、その一週間、教材づくりなどに時間をとられて、退出が8時を超えるときも。学年会がほぼ毎日ある。	生活が厳しいのは、団地とか古いアパートなどに住んでいる子たち。貧困を感じるの、虫歯の治療状況や保護者の授業参観率、進んでいる地域とそうでない地域の格差が大きい。
J氏	7時に自宅を出発、40分少々かけて出勤、8時前には学校に到着。低学年担当だが6時間目まで勤務する。	いつも1学期が忙しい。学級開きやネームプレート、学級通信の作成など。初任研から、二年研、三年研まであって、毎年授業を見せないといけないことが、とても疲れた。	裕福なところはけっこう勉強に力を入れるので、習い事とかもやってる子も多かった。塾、公文、算盤。とっても厳しいなっていう家庭は部活に入っていない(用具が買えない)、習い事なんてしてない。で、学力もそんなに高くない。要保護とかもいた。	



## 注

- 1) 調査時点における退職・現職という世代区分の仕方はもちろん便宜的なものではある。しかし結果的には1990年代後半に訪れる階層的分断による貧困問題の再浮上(上間 2009: 151-155)や各種の教育荒廃、国家による教師・学校への攻撃(久富 2017: 132-133, 139-143)がなされるようになるという時代変化をめぐっての対照性のある程度は映し出すものとなっているように思われる。
- 2) 最近発表された2015年度における日本全国の子どもの貧困率は13.9%とされている(厚生労働省 2017: 15)。
- 3) 本調査研究は、科学研究費助成事業を受けた共同研究「沖縄における貧困と教育の総合的調査研究」(研究代表者上間陽子、課題番号 26381136)の成果である。
- 4) 質問項目の作成にあたり、山崎鎮親(2014)による教員調査研究の調査項目を参考にした。
- 5) 現在の子ども・若者たちの間では、相互の人間関係・ポジショニングをめぐって多大なエネルギーが注がれるようになってきている(長谷川 2013: 132-139)。教室内で形成されるカースト構造は、「なぜだかよくわからないけれど強い立場にいる児童生徒と、なぜだかわからないけれど弱い立場にいる児童生徒のような関係性」(鈴木 2012: 64)、あるいはまた、「現代のいじめは典型的な『いじめっ子』やガキ大将だけが起こすものではない……どの子が『いじめっ子』であり、どの子が『いじめられっ子』となるのかは、児童・生徒の日常の行動系列から予測できなくなっている」(森田・清永 1994: 56)などの指摘にみられるように、現代の子ども・若者の人間関係のありようは了解不能性が高くなっているのが特徴的である。
- 6) 1. で先行研究を引用する形で触れたように、貧困の真の深刻さは、教師にとってヴェールに遮られたままとなりやすい(例えば本インタビュー調査では、「生活保護受けてるんですね。お母さん。若いんですけど仕事しないんですよ。汗水流して働くことにもう全くもう〔無頓着〕」「むしろ先生たちの中では、要保護とかの方がお金持ってるね、みたいな話がありました」という厳しめの回答が現職世代教師の中にみられた)。山崎鎮親によれば、教師の世界では、子どもの貧困や低学力といった経済的・文化的な「不足」が、「素朴・純粋・幼さ」というポジティブな像へと読みかえられる構図が過去にあっても現在の格差社会下にあっても存在していることを明らかにしている(山崎 2014: 355-356)。これは教師の持つヴェールの一形態として理解することができよう。ただ、本文でみたような、生徒とのある種・ある程度の距離感を持ち得る教育関係自体は、教師が教育実践を円滑に進める上での重要な条件の1つでもあるように思える。
- 7) 例えば今日では週案提出が当たり前のことになっているものの、かつてはこれを教育現場への過剰な管理・自律性への侵害と受けとめる主張があったことは記憶にとどめておく必要があるように思える。「週案にみられる問題は、問題自体としては教師の実践におけるオートノミイと学校における教師集団の計画、それをとおしての学校のオートノミイの形成という基本的課題をふくみつつ、現象としては、きわめて管理的な今日の学校教育の体質的病理を示しているのである」(稲垣 1976: 140)。
- 8) 勝野正章は、夏季休暇中に「学校として研修を計画することもあります、学校全体の方針が重視されすぎて、個々の教師の主体的な研修の余地がほとんど残らないとしたら、これも問題でしょう……そのような研修が子どもたちの利益になるものかどうか、根本的なところから検討できる自律性が必要だと思います」と述べている(勝野 2014: 19)。
- 9) このような個人化された状況は教師間の関係についても同様にあらわれている。「若い頃、20代30代の頃って、やっぱり耳に痛いことをしっかり言ってくれる先輩たちがいたんですよ。これはだめだよ、Dさんとか。今少しその辺が減っているっていう気がするんですよ。だからまあ、私みたいなのをうるさいなあみたいな、あまりつきあいたくないな、という存在かも知れないと思うんですけど、そういう意味で、違うとかおかしとかって言う時にきちんとこう言える、退職するまでそれは言い続けようかなと思ってます」〔D氏〕。
- 10) 例えば次のようなケースは貧困問題を解決に導くというよりも貧困を顕在化させない対応と言える(盛満 2011: 285-287)。「『先生、お金貸して下さい』って言うのよ。びっくりして。『そんなことはできませんが』って言って、もう、貸さないから、『これで何か子どもにおやつでも』って一万円あげたの。〔本当は〕何十万か貸してほしかったんだろうけど。『私ができることはこれだけです』って言って。最後やっぱりね、また赤ちゃんが生まれて、水道も電気も切られたって、引っ越していった」。後にC氏は福祉との連携に取り組

むようになっていく。

## 参考文献

- 阿部彩 (2011) 『弱者の居場所がない社会——貧困・格差と社会的包摂』 講談社現代新書。
- 浅野誠 (1993) 「『休』を『教える』——『休』にとまどう学校のために」 全国生活指導研究協議会編『生活指導』459、1993年8月。
- 原田真知子 (2001) 「『悪ガキ』たちとともに」 全国生活指導研究協議会常任委員会編『暴力をこえる——教室の無秩序とどう向き合うか』 大月書店。
- 長谷川裕 (2013) 「いじめの理論——社会学的視点からの原理的考察」 教育科学研究会編『いじめと向きあう』 旬報社。
- 本田由紀 (2009) 『教育の職業的意義——若者、学校、社会をつなぐ』 ちくま新書。
- 今関和子 (2009) 『保護者と仲よくする5つの秘訣——子どもの生きづらさ、親の生きづらさに寄り添う』 高文研。
- 稲垣忠彦 (1976) 「週案と教師のオートノミイ」 『季刊教育法』 総合労働研究所、19、1976年4月。
- 岩川直樹 (2007) 「顔を奪うシステム——全国一斉学力テストの忌まわしき作用」 岩川直樹・伊田広行編著『貧困と学力』（未来への学力と日本の教育8） 明石書店。
- 勝野正章 (2014) 「夏休みを前にして、Wさんへの手紙」 教育科学研究会編『教育』 かもがわ出版、822、2014年7月。
- 木村元・松田洋介 (2011) 「高度成長期の社会と教育」 橋本紀子・木村元・小林千枝子・中野新之祐編『青年の社会的自立と教育——高度成長期日本における地域・学校・家族』 大月書店。
- 厚生労働省 (2017) 「平成28年度国民生活基礎調査概要」 (2017年6月27日発表、p.15表10) <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/16.pdf> [2017年7月30日閲覧]
- 久富善之 (1990) 「教員文化の社会学・序説」 久富善之編著『教員文化の社会学的研究<普及版>』 多賀出版。
- (1993) 「学校から見えるヴェール—重——教師・学校にとっての生活困難層」 久富善之編著『豊かな底辺に生きる——学校システムと弱者の再生産』 青木書店。
- (2017) 『日本の教師、その12章——困難から希望への途を求めて』 新日本出版社。
- 盛満弥生 (2011) 「学校における貧困の表れとその不可視化——生活保護世帯出身生徒の学校生活を事例に」 日本教育社会学会編『教育社会学研究』88。
- (2017) 「子どもの貧困に対する学校・教師の認識と対応」 教育と医学の会『教育と医学』2017年3月。
- 森田洋司・清永賢二 (1994) 『新訂版いじめ——教室の病い』 金子書房。
- 中澤篤史 (2014) 『運動部活動の戦後と現在——なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』 青弓社。
- (2017) 「顧問教師の戦後と現在——なぜ教師は部活動にかかわるのか」 『季刊教育法』 エイデル研究所、189、2016年6月。
- 沖縄県 (2016) 『沖縄県子どもの貧困対策計画』 2016年3月。 <http://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/kodomomirai/seishonen/kosodatec/documents/okinawakenkodomonohinkontaisakukeikaku01.pdf> [2017年7月30日閲覧]
- 鈴木翔 (2012) 『<sup>スクール</sup>教室内カースト』 光文社新書。
- 武内一 (2016) 「子どもの健康への影響」 松本伊智郎・湯澤直美・平湯真人・山野良一・中嶋哲彦編著『子どもの貧困ハンドブック』 かもがわ出版。
- 高石啓人 (2016) 「教師の貧困家庭対応研究——子どもの権利保障に着目して」 子どもの権利条約総合研究所編『子どもの権利研究』27。
- 戸室健作 (2016) 「資料紹介 都道府県別の貧困率、ワーキングプア率、子どもの貧困率、捕捉率の検討」 『山形大学人文学部研究年報』13。
- 上間陽子 (2009) 「貧困が見えない学校——競争の時代区分で見る学校から排除される子ども・若者たち」 湯浅誠・富樫匡孝・上間陽子・仁平典宏編著『若者と貧困——いま、ここからの希望を』 明石書店。
- 綿貫公平 (2012) 「『中学校と地域』の自分史——一九九八～二〇一二年」 竹内常一・佐藤洋作編著『教育と福

社の会合ところ——子ども・若者としあわせをひらく』山吹書店。

山崎鎮親（2014）「教師からみる子どもたちの学校体験：『他者化』の視線を中心に」長谷川裕編著『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難』旬報社。

湯澤直美（2016）「沖縄子ども調査結果に関する考察」『沖縄子ども調査 調査結果概要版』（沖縄県からの業務委託により一般社団法人沖縄県子ども総合研究所が2015年10月～11月にかけて調査を実施）2016年3月25日。<http://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/kodomomirai/documents/okinawakodomotyousagaiyouban.pdf>〔2017年7月30日閲覧〕